

『千載佳句』所収白居易詩逸句考（下）

植木久行

【前稿に続く】

● 3774 「木芙蓉」「晝函一作 涵 秋露誰相似、如玉佳人帶酒容」

「草木部・木芙蓉」所収。○「校語」上句の「晝」字、松平文庫本・内閣文庫乙本・花房（＝金子）本・朱『箋校』・陳『統拾』は、いずれも「晚」に作るが、ここでは鎌倉期古鈔本・内閣文庫甲本の文字に従う。両字は草書体が類似しているため、この異同が生じたのであろう。また「秋露」の露字、花房（＝金子）本・朱『箋校』・陳『統拾』は「霧」に作るが、ここでは鎌倉期古鈔本・内閣文庫甲本・乙本に従う。おそらく霧の字は、「露」字の形訛であらう。○

「訓読」 「木芙蓉」 「晝に秋露を函めるは 誰にか相ひ似たる、玉の如き佳人の 酒を帯ぶる容ならん」 ○「通釈」

「木芙蓉の花」「まだ暗い夜明けどき、冷たい秋の露にしつとり潤う、木芙蓉の紅い花の風情は、いったいどんな人に似ているのであろうか。輝くような美しい女性が、酒に酔って、ほんのりと顔を紅くした、そんな艶姿であらうか。」

○「語釈」 「木芙蓉」 アオイ科の落葉低木、中国原産。木蓮・拒霜花・地芙蓉などとも呼び、水辺に生え、秋の半ばすぎ、紅・淡紅・白・黄色などの花を咲かせる。木芙蓉の名は、水芙蓉、いわゆる蓮の花に対する言葉である。明の李時珍『本草綱目』卷36、灌木類・木芙蓉の条にいう、「此の花、艶なること、荷の花の如し。故に芙蓉・木蓮の名有り。八九月始めて開く。故に拒霜と名づく」と。白詩¹³⁷⁶「木芙蓉の花の下にて客を招いて飲む」（長慶三年、52歳、杭州での作）に、「怕るる莫かれ 秋に酔ひに伴ふ（酔眼を楽ませる）物無きを、水蓮の花尽きて 木蓮開く」と

あり、同2219「吳中の好風景」詩（宝曆二年、55歳、蘇州での作）にも、仲秋八月の美しい風景を、「木蓮の花未だ歌きず（しばまない）」と歌う。ちなみに嚴論文に指摘されるように、この木芙蓉は都長安付近では見かけない、南方（長江流域）特有の花木の一種であった。南宋の潜説友「咸淳臨安志」巻58、物産・木芙蓉の条にいう、「今、（杭州西湖の）蘇堤及び湖岸に多く種はり、秋日は霞錦の如し」と。〔函〕 鎌倉期古鈔本・松平文庫本などに見える訓「フクメル」に従う。『詩経』周頌「載芟さいせん」の鄭箋に、「函、含也」とある。ここでは、ぬれそぼる、水分を中に包みこむ意。異文の「涵」も、たつぷりと潤う、水中に浸す意。

〔秋露〕 韓愈が永貞元年（八〇五）、江陵（湖北省荊州市）に赴く途中で作った「木芙蓉」詩には、叢生する枝先に、秋の冷たい露に濡れつつ開きはじめた木芙蓉の花を、「新たに開く 寒露の叢まぎ 遠く水間（の蓮の花）に比べて紅なり」と歌う。また中唐の李嘉祐「秋朝の木芙蓉」詩にも、「平明（夜明け） 露滴りて 紅臉垂こうれんたる」とある。こうした唐詩の表現を考えると、「秋霧」よりも「秋露」のほうがまざる、と判断されよう。〔相似〕 相は動作の対象が存在することを示す接頭語。くに似る意。〔如玉佳人〕 玉の温潤さを彷彿とさせる美女。輝くように美しい女性。後漢の作者未詳「古詩十九首」其十二に、「燕趙には佳人多く、美しき者は顔かんばせ 玉の如し」と明瞭に表現されて以降、「玉の如し」は「玉顔」「玉容」などの語とともに、輝くばかりに美しい女性（妓女を含む）を描写する常套表現の一種となった。白詩「清明の日、妓の舞ひを観て：」（長慶三年、52歳、杭州での作）にも、「舞ひ（舞踊の女性）を看れば 顔玉の如し」とある。また「佳人」の語は、前漢の李延年の歌に、妹（李夫人）を「北方に佳人有り、絶世にして独立す」云々（漢書）巻97下、外戚伝）とあるのが思い起こされよう。

〔帯酒容〕 微醺を帯びて紅らむ容貌。「帯酒」は酒気を帯びる、酒に酔う意。中唐の李郭「長安少年行十首」其二に、「晚日尋花去、春風帶酒帰」とある。また白詩にも、二例ある。「カタチ」の訓は、鎌倉期古鈔本・松平文庫本などの傍訓に従う。清初の園芸書『広群芳譜』巻39、花譜・木芙蓉の条には、「朝は白く、午ひるには桃紅、晩には大紅（真紅）」

になる品種「醉芙蓉」を記す。これは、しだいに紅みを増す花の色を、酒に酔う顔色に見立てた命名である。ところで「醉芙蓉」の語は、すでに白居易の³³⁶⁸「憶江南詞三首」其三のなかに、「吳酒一杯 春竹葉、吳娃^あ双舞 醉芙蓉」として見える。これは開成三年（八三三）、作者67歳のとき、東都洛陽でかつての任地、蘇州や杭州をなつかしんで作った詞である。この歌詞中の芙蓉は、従来一般に蓮の花を指す、と解釈されてきた。しかし白詩のこの逸句を考えあわせるとき、醉芙蓉の芙蓉は蓮の花ではなく、木芙蓉のそれを意味するように思われてくる。並び舞う蘇州美人のあでやかさを、朝露に濡れて「酒を帯ぶる、佳人の容^{かんばせ}」を連想させる、紅くつややかな木芙蓉の花になぞらえた表現ではないか、と。五代の閻選の詞「虞美人」其二（「花間集」卷九）の「一枝嬌臥 醉芙蓉」の句も、美女が醉臥する艶姿を、枝先に咲きみちる木芙蓉に見立てた表現であり、白詞の影響も当然考えられよう。

○「備考」 作成年代未詳。木芙蓉が生える地域を考えると、おそらく杭州・蘇州刺史在任中、作者五十代前半の作だろう。ただ忠州刺史在任中に作られた可能性も残るが⁽⁵⁾。

●3775 「杭州景致」「松風碎助潮声急、竹露零添澗水流」

「草木部・松竹」所収。 ○「訓読」 「杭州の景致」「松風碎けて⁽⁶⁾ 潮声を助けて急なり、竹露零ちて 澗水に添ひて流る」 ○「通釈」 「杭州の美しい風景」「松の樹々を揺らす風の音が、まるで細かく碎け散り、ばらまかれたように、あちこちから聞こえて、錢塘江の逆流する潮^{うしお}の声をいつそう激しく響かせる。緑の竹の葉末に置いた露が次々としたり落ちて、谷川の水につき足されて流れていく。」

○「語釈」 「景致」 美しい風景。致は情趣、ありさま。「景勝」「景象」とはば同意。白詩⁰⁸²⁶「周皓大夫の新亭子に題す…」（元和十年、44歳、長安での作）に、「規模（亭の建築）何れの日か創^はむる、景致 一時に新たなり」とある。

「松風」唐代、杭州の州庁が置かれた鳳凰山（杭州市の南郊）の北には、松の樹々が茂る万松嶺があった。白詩¹³⁷³「余

杭(杭州の郡名)の形勝⁽⁷⁾にいう、「城を払ふ松樹は一千株」と。本詩は長慶三年(八二三)の秋(八月十八日前後)、杭州の州庁内(の郡亭・虚白堂⁽⁸⁾)での作であろうか。「碎」まるで一つのものが碎け散つてばらまかれたように、あちこちから響いてくるさま。白詩²³³⁰「新春江次」(長慶四年、53歳、杭州での作)に、「莫怪珂声碎、春来五馬驕」とあり、佐久節訳に「春が来たので、駒が勇み、珂(馬のくつわ飾りの玉)声が特に耳立つて聞える」云々とある。「潮声」杭州城南郊を東流する钱塘江のそれ。当時、州庁内からも、その潮(浙江潮・钱塘潮)がよく見えた。「潮声」の語は、白居易が杭州刺史に着任する途中、觀潮できる喜びを歌った詩⁰³³⁵「長慶二年七月、中書舍人より、出でて杭州に守たり…」に、「已に想ふ海門山(钱塘江の河口に、門のようにそそり立つた兩岸の山の総称)、潮声来りて耳に入るを」と見える(51歳の作)。これは、仲秋八月十八日前後に起こる海水のすさまじい逆流現象、いわゆる浙江潮・钱塘潮が引き起こす、雷鳴のごとき大音響を指す。本条の「潮声」も、平素見られる钱塘江の川波の響きではなく、現存詩によれば、初唐の宋之問「靈隱寺」詩以降、徐々に詩材として定着した浙江潮のそれであり、劉禹錫「浪淘沙詞九首」其七に歌われる「濤声」と同意であろう。そう理解してこそ、杭州独自の「景致」となる。

〔竹露〕竹の葉に置く露。白詩⁰²⁰⁸には、「竹露冷煩襟(煩悶する胸中)、杉風清病容」(題楊穎士西亭)元和五く六年、長安での作)の用例がある。この場合も、本条と同じく露と風が対になる。〔澗水〕松平文庫本は「タニミヅ」の傍訓を付す。下句はおそらく、もと海底であった関係から、山沿いの地を除いて、塩からい飲み水に苦しんだ、当時の杭州の状況を踏まえていよう。周圀の山々から西湖(钱塘湖)に流れ込む溪流は、地中に埋めた竹管を通して、人々の生活用水に利用された。⁽¹⁰⁾ 砕け散る松風の音を加えて、いつそう激しく鳴り響く潮声、竹露をたたえた清らかな溪流水、この二つこそ、杭州の景致を作り上げる要因、と考えたのである。

○〔備考〕嚴論文は、杭州刺史在任一年八ヶ月間の作と見なす。しかし「潮声」と「竹露」の語によれば、本詩は秋八月の作であろう。白居易は長慶二年十月、杭州に到着し、長慶四年五月、離任した。とすれば、本詩は、長慶

三年秋八月、作者52歳のときの作となろう。

● 3776 「重陽日」「茅屋老妻良醞酒、東籬黃菊任開花」

「草木部・菊酒」所収。○「校語」鎌倉期古鈔本・松平文庫本・内閣文庫甲本・乙本・金子校定本には、詩題中の「日」字に、「イ无」の注記がある。无は無の略字。これは、「日」の字がない異本の存在を指摘する校語である。○「訓読」

「重陽の日」「茅屋の老妻は 良く酒を醸し、東籬の黄菊は 花開くに任す」○「通釈」「重陽節の日」「茅葺きの小さな家（草堂）に住む、わが老妻は、酒の醸造に優れて、（その手作りの酒も飲み頃となり）、東の籬のもとには、（重陽節の花である）黄色い菊の花が、自由気ままに咲いている。」

○「語釈」「重陽」 晩秋九月九日の重陽節。この日、小高いところに登り（登高）、菊の花びらを浮かべた酒（菊酒）を飲み、茱萸の紅い実をつけた枝を髪に挿して、晩秋の一日を楽しんだ。いずれも辟邪や延命のためと伝える。詳しくは拙著『唐詩歳時記』（講談社学術文庫）参照。「茅屋」「草堂」とほぼ同意。白詩⁰⁸⁸⁶「王処士の郊居に題す」にいう、「陽」

に向へる（南向きの）茅屋 両三間」と。本条の茅屋は、おそらく元和十二年（八一七）晩春三月に落成した、三間兩柱の間口、奥行き五間（二室・四廂）の、廬山の草堂を指そう。落成当時、作者は46歳である。「酒」自家製の酒

「家醞」。白居易は下邳県の漕村に退去したとき、すでに家醞を造る（元和八年、42歳の時に成る「效陶潛體詩十六首」其六・其八参照）。やがて摘み取る菊の花を、この酒に浮かべて飲み、延命長寿を祈るのである。白詩³³⁷⁷（劉）「夢得と酒

を活活ひて閑飲し、且つ後期を約す」（開成三年、67歳、洛陽での作）にいう、「更に菊黄に 家醞熟するを待ちて、君と共に一たび酔ひて 一たび陶然たらん」と。「東籬黃菊」陶淵明の「飲酒二十首」其五の、「菊を采る 東籬の下、悠然として南山を見る」を踏まえた表現。隱逸詩人陶淵明の故郷は、同じ江州の地（廬山の北側）にあったので、

わが家の菊を陶淵明のそれに見立てて、高逸・幽雅の雰囲気にはたつたのであろう。白居易は、草堂の成る一年前の

元和十一年、陶淵明の旧宅を訪ねている。

○「備考」本詩は、廬山の草堂が落成した元和十二年(八一七)か、翌年の重陽節の作ではなからうか(元和十三年十二月、忠州刺史となり、翌春、江州を離れる)。とすれば、作者46〜47歳、江州司馬在任時の作となる。

●³⁷⁷⁷「重陽日」「敬亭山人帰遠、峽石溪邊水去斜」

「別離部・送別」所収。

○「校語」

前条と同じ詩題であるが、本条の場合、「日」字を欠く異本の存在を指摘する注記はない。

○「訓読」「重陽の日」「敬亭山人 帰ること遠く、峽石溪邊 水去ること斜めなり」¹³ ○「通釈」

「重陽節の日」「宣州敬亭山のかなたへ、旅立つ人ははるばると帰りゆき、ここ峽石溪のあたり、谷川が激しくほとばしりつつ流れゆく。」

○「語釈」「敬亭山」宣州(安徽省宣州市)の西北郊外約五キロにある山の名。南斉の謝朓、盛唐の李白以来の詩跡。

詳しくは松浦友久編『漢詩の事典』五二二頁以下参照。白詩³⁴⁵⁶「宣州の崔大夫(龜從)閣老、忽ち近詩数十首を以て

示され…」のなかに、「再び宣城(宣城郡太守謝朓)の 章句動くを喜び、鱗を飛ばして遙かに賀す 敬亭山」とある。

「峽石溪」未詳。朱『箋校』も固有名詞と見なすが、箋注を欠く。この峽石溪は、峽石溪の形訛か。峽石溪の誤り

であるとすれば、杭州塩官県(杭州市の東北、今の海寧市硤石鎮付近)の谷川とならう。清初の顧祖禹『讀史方輿紀要』

卷九十、杭州府塩官県の条に、「県の東北六十里。一に紫微山と名づく。其の並びて峙つ者を贊山と曰ふ。両山相ひ

夾み、中 河流を通じ、硤石湖と曰ふ。唐の白居易、嘗て此に登る。因りて其の官(白居易は長慶二年、中書舍人「紫

微舍人」から杭州刺史となった)を以て之に名づく」とある。¹⁴そして「唐の白居易、嘗て此に登りて、硤石湖を望ん」(『大

明一統志』卷38、杭州府紫微山の条)だときの作とされるものが、陳『統拾』卷28に収める「西山に登りて硤石湖を望む」

詩なのであろう。その詩には、「居民 地僻りて 常に事無く、太守 官閑にして 好んで独り来る」とある。この「西

山に登りて……」の詩が、白居易自身の作であることが確定できれば、本条の形訛説は、重要な論拠をもつことになる。南宋の潜説友『咸淳臨安志』（大化書局刊『宋元地方志叢書』所収の、清・道光十一年汪氏刊本）巻27、紫微山の条にも、硤石湖を峽石湖に誤っている。

○「備考」花房本（二七四頁）は、ほぼこう指摘する——二種の「重陽日」の逸句は、『千載佳句』では、それぞれ菊酒と送別の条とに分載されているが、これは二種の「任氏行」や「新艶」の逸句と同じく、一首中の句と見なし、同題の下に連ねることにする、と。このうち、二種の「任氏怨歌行」は、『千載佳句』のなかでは、それぞれ美女と遊獵の条に分収されているが、同一作品中の逸句である、と判断される（前稿参照）。他方、「新艶」の場合は、逸句の下に記される注記によつて、同一作品中の逸句となる。しかし「重陽日」（一作「重陽」と「重陽日」の二種が、同一作品中の逸句であると推定できる論拠は、現在のところなさそうである。現存の『千載佳句』に見える詩題注記は、「一定した理念のもとに抽出表記したものでなく、かなり恣意的、かつ杜撰であつたからである（金子本五五〇頁）。『全唐詩』においては、「重陽」という詩題はあるが、「重陽日」となつた場合、たとえば皇甫冉「重陽日酬李觀」のように、あとに言葉が続くのが通例である。この意味でも「日」の異文の有無は重要なのである。

陳「統拾」も、本条と前条を、同一の詩「重陽の日」中の逸句として捉え、「敬亭山人帰遠、峽石溪邊水去斜。茅屋老妻良釀酒、東籬黃菊任開花」として収める。これは、①韻字「斜」と「花」が同一の下平声麻韻に属することおよび②韻律（粘法）を考慮して、各二句の前後を定めたものであろう。一首中に排列する最初の試みであるが、にわかには賛同できない。というのは、両者は①詩題の「日」字に関する異文の有無に異同がある、また②現時点では、「茅屋……」の句は江州司馬在任中の作、「敬亭……」の句は杭州刺史在任中の作、と考えるのが最も穩当のように判断されるからである。従つて同一詩中の逸句であるという確証が得られるまでは、やはり別個の詩と見なして扱うべきであらう。もつとも「峽石溪」が廬山山中にある可能性も皆無とは言えないであらうが……。

● 3778 「春興」「晚隨酒客花間散、夜与琴僧月下期」

「宴喜部・琴酒」所収。 ○「校語」朱「箋校」は、「花間」を「花開」に作るが、これは単純な誤植。 ○「訓読」「春興」「晚には酒客に随つて花間に散じ、夜には琴僧と月下に期す」 ○「通釈」「春の日の楽しみ」「夕暮れどき、酒飲み仲間の後について(今まで酒宴を開いていた、咲き乱れる花木のほとりを立ち去り、夜には琴を奏でる風流な僧侶と(おぼろにかすむ)月明かりのもとで落ち合つて遊ぶのだ。」

○「語釈」「春興」春の季節がもたらす楽しみや感興。春遊のおもしろさ。白詩には「秋興」の語を二例用いるが、「春興」の語は見えない。ただ賀知章・武元衡・齊己には、それぞれ「春興」詩が一首ずつ伝わる。「酒客」酒飲み仲間。

白詩「諸客と共に酒を携へて、早に桜桃花を見る」(長慶四年、53歳、杭州での作)に、「晩に桜桃の発くを報ずれば、春 酒客を携へて過る」という。「琴僧」白詩²⁵⁶⁵「殷協律に寄す」に見える「琴詩酒の伴」の類であろうが、「琴僧」の語は、この逸句のみである。張籍の詩には、二例見える。「期」場所と時間を決めて会う約束をする。

○「備考」作成年代未詳。晩年、東都洛陽に住んだ約二十年間の作であろう。

● 3779 「新艷」「雲鬢独挿鈿蜻蜓、雪手輕揉玳瑁箏」

「宴喜部・箏」の脚注に、「新艷の発句(律詩の首聯)に云ふ」として見える。 ○「校語」「雲鬢」の字、花房(＝金子)本・内閣文庫乙本・朱「箋校」・陳「統拾」は、いずれも「雲環」に作るが、環は同音の「鬢」の誤り。ここでは、鎌倉期古鈔本・松平文庫本・内閣文庫甲本に従う。また挿の字、諸本は「挿」に作るが、これは挿字のくずし字であろう。朱「箋校」が「挿」字に作るのに従う。「鈿」字、松平文庫本・内閣文庫乙本・花房(＝金子)本・朱「箋校」・陳「統拾」は、いずれも「細」に作るが、ここでは鎌倉期古鈔本・内閣文庫甲本に従う。おそらく「細」字は「鈿」の形訛であろう。

輕揉の「揉」字、諸本は「柔」に作るが、朱『箋校』のみは、文脈上から揉(なでる、ひねる)字に改めている。「輕柔」という言葉自体はあるが、これでは手と箏との関わりが不明瞭となる。ここでは、しばらく朱『箋校』の意改に従う。○「訓読」「新艶」「雲鬟に独り挿す 鈿蜻蜓 雪手もて軽く揉づ 玳瑁の箏」○「通釈」「ういういしく、あでやかな娘」「雲なす豊かで美しい黒髪には、ただ黄金の蜻蜓飾りのかんざしだけが挿され、雪のように真つ白な手で、籠甲細工の施された、みことな箏(の絃)を、軽やかになでて弾く」

○「語釈」「新艶」清新さをたたえた、艶麗な女性。元和九年(八一四)に成る元稹の「王協律の 杭・越に遊ぶを送る十韻」詩に、「洗渚(西施ゆかりの洗紗溪) 新艶に逢ひ、蘭亭 旧題を識る」とある。新艶の語は、花の清新・艶麗なさまにも用いられる。〔発句〕律詩の首聯を指す。いわゆる首聯・頷聯・頸聯・尾聯を、それぞれ発句・胸句・腰句・落句と呼ぶ場合の呼称。『作文大体』「第四句名」参照。〔発句〕の語は、嚴羽「滄浪詩話」詩法にも見える。〔雲鬟〕女性の、黒々として豊かな美しい髪。鬟は本来、髪の毛を結つて輪の形にしたわけを意味し、当時の、湧き起る雲のように高く大きく結い上げた髪型を指す。また単に髪の意味と考えてもよいだろう。杜甫「月夜」詩の「香霧雲鬟湿ひ、清輝 玉臂寒からん」の用例が有名。〔雲髻〕の類語。白詩「箏」(大和七年、62歳、洛陽での作)には、箏を奏でる美女の黒髪を、「雲髻 飄蕭として緑なり」と歌う。〔鈿蜻蜓〕蜻蜓はトンボ。ここでは鈿(金・銀・玉・貝などをちりばめ、はめこむ意)の細工を施した、トンボ形のかんざしを指す。晚唐の温庭筠「夜宴の謠」にも、「長釵髪より墜つ 双蜻蜓」と見える。寒山詩の「髻に挿すは 玉鴛鴦」は、玉製のオシドリ飾りのかんざしであろう。〔雪手〕白詩「箏」には、箏を奏でる女性の白い手を、「十指 春葱を剥ぐ(表皮を剥いだ春のネギのように白い)」と詠む。〔揉〕箏の絃を左右になでひねる指の動作を表すか。〔玳瑁〕南海に産する龜の一種。その甲、いわゆる籠甲は、半透明・黄褐色で黒い斑点があり、種々の物の裝飾品として珍重される。ちなみに元稹の「(元和)六年春遺懷八首」其四にも、「玳瑁の箏」が見える。〔箏〕琴の一種。音はソウ(漢音)、シヨウ(呉音)。狩谷校斎『箋注倭名類

聚抄』卷六、音楽具・箏の考証にいう、「箏は本と五絃。魏晉以後、増して十二絃と為り、隋唐に至りて、又た増して十三絃と為るなり」と。

○「備考」作成年代未詳。トンボ飾りのかんざしを詠んだ詩句としては、現存最古のものであろう。

●3780 「新艶」「飛雁一行挑玉柱、十三絃上語嚶嚶」

「宴喜部・箏」所収。前条と同一作品中の逸句。○「訓読」「飛雁一行 玉柱に挑げば、十三絃上 語る

こと嚶嚶たり」○「通釈」「ういういしく、あでやかな娘」「天空を飛ぶ雁の群れのように並んだ琴柱のうえに張られた十三本の絃。それを(指先にはめた銀甲で下から上へと)かきあげれば、まるで鶯がまろやかに鳴き交わすように響きわたる」

○「語釈」「飛雁一行」一行は一行。杜甫「絶句四首」其三の「一行の白鷺 青天に上る」が有名。ここも「一行飛雁」とするべきところを、平仄の関係で上下を逆にしたもの。この「一列の飛雁」とは、斜めに点々と置かれた琴柱(琴の胴上に立てて、絃を強く張ったり、音の高低を調えるための具)を、列を作つて飛ぶ雁の群れ「雁行」に見立てた描写。「挑」はぬる。はじく。金子本は「玉柱を挑げ」と訓み、鎌倉期古鈔本・松平文庫本等は「イトム」の傍訓を付すが、ここでは箏の演奏技法の一つ、絃を指先にはめた銀甲で、下から上へかきあげ、はねる動作を指す。白詩⁰⁶⁰³「琵琶の引」には、その演奏技法を、「軽く擁へ 慢く燃り 抹み復た挑く」と表現する。「玉柱」白玉製の琴柱。単なる美称と考えてもよい。白詩「箏」に「柱触れて 玉玲瓏たり」とある。「語嚶嚶」「詩経」小雅「伐木」に見える「鳥鳴くこと嚶嚶たり」を踏まえた表現。「嚶嚶」は、鳥が鳴き交わす声。和やかに鳴く声。南朝・梁の吳均「與朱元思書」に、「好鳥相鳴、嚶嚶成韻」とある。なおこの鳥は、続く「幽谷より出でて、喬木に遷る」の句によって、唐代、春告げ鳥「鶯」を指す、と考えられた。『白氏六帖事類集』卷29、鶯の条に「出自幽谷、遷于喬木」の詩句を引く。なお前掲の白詩「箏」

のなかには、箏の凄苦・甘美、兩種の音色を、「援苦しみ 啼きて月を嫌ひ、鶯嬌び 語りて風に詭はる（あまえる）」と歌う。

○「備考」陳『統拾』は、同一詩「新艷」中に属する前条と本条を、前条に本条を直接続ける形で収める。前条は律詩の発句（首聯）であるが、本条は対句でない「散句」であるため、尾聯（落句）である可能性が高い。無雑作に逸句を続けて無用の誤解を招くべきではなからう。

● 3781 「同夢得醉後戲贈」「唯欠與君同制令、一時封作醉鄉侯」

「宴喜部・醉」所収。○「校語」欠けんの字、花房本は「缺」の字に作る。これは、鎌倉期古鈔本・松平文庫本・金子校定本等に作る「欠」を、「缺」字の代用と判断して改めたものであろうか。しかし欠自体に不足する、欠ける意味があるので、「欠」字のままにしておくべきであろう。一例をあげれば、白詩「寒食夜」に、「忽因時節驚年幾、四十如今欠一年」とある。朱『箋校』の「缺」字は、花房本にそのまま従つたもの。また陳『統拾』のみ、「制令」の令字に対して、「一に命に作る」と注記する。○「訓読」「夢得の『醉後 戯れに贈る』に同どうず」¹⁹。「唯だ欠けたり」と制令を同じうし、一時に封ぜられて醉郷侯と作るを」○「通釈」「劉夢得の『醉後 戯れに贈る』詩に唱和する」「ただ一つだけ欠けている。君と同じ辞令書をもらつて、同時にそろつて醉郷国の大名に封ぜられることだけが」

○「語釈」「同」「和」の意。相手の詩に唱和する。詩題中の「同どうず」は、南朝期に始まる。南斉の延興元年（四九四）に成る謝朓「同謝諮議『銅雀台詩』」が、現存最古の用例らしい。唱和の重点は、原詩を読んで感じた興趣を自由自在に表現する点にあり、通常和韻は行われない。趙以武『唱和詩研究』（甘肅文化出版社、一九九七年）第十章参照。白詩 3313 「同夢得『寄賀東西二楊尚書』」（開成二年、66歳、洛陽での作）も、こうした一例である。「夢得」元稹（八三一年没）を失つた白居易晩年の、親しい「詩友」劉禹錫の字。二人が盛んに唱和した詩は、最終的に『劉白唱和集』五巻とな

る。「制令」官僚の人事異動の際に、中書舍人もしくは知制誥によつて起草される辞令書「制誥」「制書」の類であろう。ただこうした用例は、ほとんど見かけない。異文の「制命」も、ほぼ同意。「一時」同時に、そろつて、一斉に。「醉郷侯」醉郷は醉客の別天地、酒飲みのみ天国の意。心地よく酔つて意識もおぼろになり、俗世のことなどすっかり忘れ果てた、深い酩酊感のもたらす境地を、架空の別天地に見立てた言葉。初唐の王績「醉郷記」には、「酔の郷（酔之郷）、中国を去ること、其の幾千里なるかを知らざるなり。其の土は曠然として涯無く、丘陵・阪險（険しい阪）無し。其の気は和平にして揆を一にし、晦明・寒暑無し。：阮嗣宗（籍）・陶淵明等十数人、並びに酔郷に遊んで、身を没するまで返らず、死して其の壤に葬らる。中国は以て酒仙と為すと云ふ」とある。白詩²²⁴⁷「崔賚客晦叔の十二月四日に寄せられしに答ふ」（大和六年、61歳、洛陽での作）に、「早晚か相ひ従ひて 酔郷に帰かん、酔郷此を去ること 多地（長い距離）無し」とあり、同「洛中に分司して暇多し。数ば諸客と宴遊して、酔後狂吟し……」（開成二年、66歳、洛陽での作）に、「業を改めて逋客（隱者）と為り、家を移して 酔郷に住せん」と詠む。「作：侯」は封侯（領地を与えられて諸侯に封ぜられること）の意。

○「備考」本条は、詩題や詩句の表現から臆測すれば、劉禹錫が開成元年（八三六）の秋、白居易の住む東都洛陽の分司となつて、二人の交遊がいつそう親密度を加えたころの『洛中集』（『劉白唱和集』巻五部分）の一篇か、それから漏れた作品ではなからうか。『洛中集』は開成二年の夏以降、会昌元年（八四二）までの作品を収めている（劉禹錫は会昌二年七月没）。二人は同年齢なので、66歳から70歳に到る最晩年の唱和とならうか。前掲の白詩³³³⁵（劉禹錫禹錫「樂天の『酔後の狂吟十韻』に酬ゆ」（原注「米章に「家を移して酔郷に住せん」の句有り」、同じ開成二年、66歳の作）には、「酔郷に向かひて去らんと欲するも、猶ほ色界の牽くところと為る」という。酔後の楽しみをたたえる本条の詩意とも似かよるところがあり、特に注目されよう。嚴論文は、大和三年（八二九）三月に成る白居易の「劉白唱和集の解（序文の意）」に見える、唱和詩一三八首以外の、「興に乗じ酔ひに扶けられて、率然として口号せし者」のう

ちの一篇か、と推測する。この場合、58歳以前となり、やや早すぎるようである。

● 3782 「行簡別仙詞」「三秋別恨攢心裏、一夜歡情似夢中」

「別離部・別意」所収。○「訓読」「簡を行りて(?)仙に別れる詞」「三秋の別恨 心裏に攢まり、一夜の歡情 夢中に似たり」。○「通釈」「書簡をやつて妓女に別れる歌詞」「一日会えなければ三秋のようにも思われる、つらい別れの悲しみが、私の心の中にどっと押し寄せ、わずか一晚の、あの逢瀬の飲びは、すではかない夢の中できごとのようです。」

○「語釈」「行簡」未詳。「行卷」の類語で、書簡を送る意か。「仙」仙女、天女。唐代では、艶冶な婦人、美女、妓女や女道士などを、「仙」「神仙」と呼んだ。中唐の施肩吾に「仙子に贈る」詩がある。また『遊仙窟』の仙も同例。ここは、あてやかな妓女を指すのであろうか。『三秋別恨』『詩経』王風「采芣」の、「一日見ざれば、三秋の如し」を踏まえた表現。三秋は、三つの秋、すなわち九ヶ月。『毛詩正義』卷四に、「三秋は九月を謂ふなり」とある。別恨の恨は、心の中にしこりが残るような、深い嘆き、無念な思い。「攢」ひと所に寄り集まる。群がり集まる。鎌倉期古鈔本・松平文庫本等には「アツマレリ」の傍訓を付す。「歡情」男女間の逢瀬の飲び、契りの楽しみ。宋玉の「神女の賦」に、「歡情未だ接せざるに、將に辞して去らんとす」(『文選』卷19)とある。また白詩「七夕」の「幾許歡情與離恨、年年并在此宵中」も、同例である。

○「備考」本条の二行小字注「白／行簡別仙詞」は、本来「白行簡／別仙詞」とあるべきものが書写の過程で誤つたものではなからうか。とすれば、艶冶な「天地陰陽交歡大業賦」の作者と伝える白居易の弟、白行簡の「別仙詞」(仙に別れる詞)の逸句、とならう。この場合、白行簡が艶麗な妓女(女道士)と別れる歌詞となり、「行簡」の二字の解釈がきわめてスムーズになる。筆者は、しばらく白居易の逸句と見なしておくが、彼の弟、「白行簡」の作ではない

かという不安もある」(花房本二七四頁)ことを記しておきたい。ちなみに、陳『統拾』は、白居易の条にも、また白行簡の条にも、本条を収めていない。おそらく判断に迷った結果であろう。

【● 3783 劉禹錫「九日登高」「今日望鄉迷處所、猿聲暮雨一時來」】

「別離部・旅情」所収。○「校語」本条の二行小字注には、「白／題新澗亭」とあるが、鎌倉期古鈔本・松平文庫本・内閣文庫甲本・乙本・金子校定本等には、いずれも「劉禹錫」「元日登高」の小字注が付されている。異本に見える作者の問題に関して、金子校定本は、「題新澗亭、兼酬寄朝中親故見贈」という詩題はあれど、此の詩句なし。併し劉禹錫の作中にも見えないので、これを白詩と見做す」と述べている(脚注)。しかしこの金子説は、「新澗亭」についての考察を怠った誤りであろう。「新澗の亭」(新たに開鑿した澗に臨める亭「小建築物」の意)とは、東都洛陽の履道里、白居易の邸宅内にあつた「西亭」の別称である。この亭に関して、白居易は³⁴⁹³「新澗の亭」(會昌元年「八四二」、70歳、洛陽自宅での作)、および前掲の³⁵⁸⁴「新澗亭」に題し、兼ねて朝中の親故(朝廷内の親戚・友人)の贈られしに酬寄す(會昌二年、洛陽自宅での作)の二詩を作っている。仮に本条の逸句が白居易自身の作であり、しかも「同時同地の作であるはずだ」(嚴論文)とすれば、こうした切実な望郷の思いは生まれなければならないはずである。というのは、晩年約二十年住んで、みずから終老の地と見做した履道里の自宅内での作であるから…。このため単純に「劉禹錫の現存詩句中に見えてみないから、これを白詩と見做しておく」(金子本四四一頁)と考える金子説は、当然再考を迫られることになろう。嚴論文自体も、たまたま白詩中に「新澗亭」を詠み込んだ二詩があることに気をとられ、新澗亭の所在地、およびそれを詠んだ二詩の作成年代を充分考察しなかつたために、この逸句が白詩ではありえないことに気づかなかつたのであろう。

この逸句の場合、作者名を劉禹錫とする異本の存在に注目すべきである。ただ異本の詩題「元日登高」の元は九の

形訛、と考えてよい。唐代、登高の行事は、一月七日の人日節と九月九日の重陽節のときに行われたが、重陽節のほうが盛んであり、しかもテキストの流布の過程で、「九」の字は時に「元」字に誤るからである。なお劉禹錫には、「九日登高詩(五絶)一首も現存する。また下句の長江流域系の詩材「猿声」と、巫山の雲雨伝説への連想を持つ「暮雨」(後の「語釈」参照)によれば、長江三峡の入口(西端)に位置する夔州(重慶市奉先県)での作であろう。劉禹錫は穆宗の長慶元年(八二二)、50歳のとき、夔州刺史となり、翌年の正月二日、当地に着任した。そして長慶四年(八二四)、53歳の晩夏六月、和州刺史となつている。この「九日登高」詩が、夔州刺史在任中の作とすれば、長慶二、三年、作者51、52歳の作とならう。当時の作者は、「永貞の革新」の挫折(二王八司馬事件)以降の、二十三年間にわたる左遷の境遇下にあつた。⁽²⁵⁾

○「訓詁」「九日登高」「今日 郷を望めば 処所に迷ひ、猿声 暮雨 一時に来る。」○「通釈」「九月九日、小高いところに登る」「重陽節の今日、小高いところから故郷のほうを眺めやれば、(あまりにも遠くて)その場所さえも見定めがたい。折しも哀切な猿の鳴き声、巫山の神女をしのばせる夕暮れ時の冷たい雨が、一緒に合わさつてわが身に押しよせ(深い悲しみを誘うのだ)」

○「語釈」「登高」重陽節の行事。小高い山や丘に登つて、災厄を払うこと。拙著『唐詩歳時記』参照。『望郷』劉禹錫は、江南(蘇州嘉興県?)に生まれ、江南で成長した。ただし彼の本籍(籍貫)は洛陽である。⁽²⁶⁾唐代、中央の政治に参与したいと願う詩人たちは、都長安を、みずから住むべき「故郷」と意識することが多い。不遇な左遷下にあると認識する作者劉禹錫にあつては、本条の故郷も、栄光ある官途に進める都長安を指している可能性が高い。「迷処所」所在や位置を見失う。場所がはつきりしない。ここでは、故郷の方角すら明瞭に定めがたいことをいう。劉禹錫「百舌の吟」には、体の小さなモズが花影に隠れて、その居場所さえわからないことを、「花枝 空に満ちて 処所に迷ふ」と歌う。また白詩⁰⁴²⁶「將に饒州に之かんとして、江浦に夜泊す」(貞元十四年、27歳、旅中の作)にも、「故

園 処所に迷ふ、一たび念へば(望めば)異文) 白頭たる堪し」とある。「猿声」長江の難所と知られる三峡地帯は、野猿の生息地として知られ(峽猿)、その鳴き声は、舟旅に苦しむ旅人の望郷の思いをかき立てる、哀切・清遠なひびきであった。⁽²⁾ 同じ夔州の地で作られた杜甫の名作「登高」(重陽節の作)に、「風急に 天高くして 猿嘯き哀しむ」とある。また劉禹錫が夔州で作った「竹枝詞九首」其八に、「巫峽蒼蒼煙雨時、清猿啼在最高枝」とあり、「始至雲安(夔州の郡名)……」詩に、「暮色四山起、愁猿數處聲」とある。「暮雨」宋玉の「高唐の賦」序(「文選」卷19)に基づく、「巫山の雲雨」伝説を思い起こさせる言葉。夢の中で契った巫山の神女は、楚の先王(懷王「襄王」と別れるとき、「旦には朝雲と為り、暮には行雨(通り雨)と為り、朝朝暮暮 陽台の下にあり」といった。ちなみに夔州の城が臨む瞿塘峽は、広義の巫峽の中に入り、この典故の利用は、地理的にも矛盾はない。夔州で作られた劉禹錫の「楊柳枝詞二首」其二に、「巫峽巫山楊柳多、朝雲暮雨遠相和」とある。「一時」一斉に合わさって、うちそろって。

○「備考」花房本・朱『箋校』・陳『統拾』は、いずれも白居易の逸句として収めるが、今後は劉禹錫詩の逸句と見なし、詩題も「九日登高」に訂正すべきであろう。

● 3784 「贈隱士」「御風縹渺多無伴、入鳥差池不亂群」

「隱逸部・隱士」所収。○「校語」縹渺の縹字、花房(『金子』本・朱『箋校』・陳『統拾』は、いずれも「煙」字に作るが、縹の形訛。ここでは鎌倉期古鈔本・松平文庫本・内閣文庫甲本・乙本に従う。陳『統拾』のみ、渺字に對して、「渺」の異文を注記する。二字は音通。○「訓読」「隱士に贈る」「風に御りて縹渺 多く伴無く、鳥に入りて差池 群れを乱さず」○「通釈」「隱者に贈る」「あなたは 風に乗って、天空をふわふわとただよい、ほとんど伴もつれずに出かける。(また時には群れを作って大空を飛ぶ)鳥たちの中に入つて、(まるで鳥のように)手足を交互に動かして軽やかに飛びゆき、鳥たちもまた恐れて群れを乱すことがない。」

○「語釈」「贈隱士」贈は、本詩を直接、目の前の相手に贈呈する意。またこの隱士は、山中に住んで、不老長生と飛翔の術を修めた仙人・道士として描かれている。逸句は、そのうちの天空を飛翔する能力を歌う部分であろう（対句）。「御風」風に乗って飛ぶ。『莊子』逍遙遊篇に、「夫れ列子は風に御りて行き、冷然として（軽やかなさま）善きなり」とある。「縹渺」軽やかに挙がるさま。風に乗って飄揚するさま。遠く遙かがかすむさま。「縹渺」「縹渺」とも書く。疊韻の形容語。白詩⁰¹⁶⁰「李夫人」（新樂府、元和四年、38歳、都長安での作）には、訪れた彼女（の魂）が、ふわりふわりと漂いつつ消え去るさまを、「縹渺 悠揚として 還た滅え去る」と歌う。また白詩⁰⁹¹³「江樓宴別」には、妓女の薄絹の衣を、風が軽やかに吹きなびかすさまを、「縹渺 楚風 羅綺薄し」と詠む。縹渺の語は、古くは西晋の木華「海の賦」に「群仙縹渺として、玉を清涯に餐ふ」と見える。「伴」松平文庫本・内閣文庫甲本には、「トモカラ」の傍訓を付す。「入鳥：不乱群」この句は、『莊子』山木篇に見える話——不死の道を説かれた孔子が、大きな沢のほとりに隠れ住んで虚心無欲となつた結果、「入獸不乱群、入鳥不乱行（獸に入るも「獸は恐れなため」群を乱さず、鳥に入るも行を乱さず）」の境地に達した、とする表現を踏まえる。「差池」鳥が翼を広げて、ひらひらと下に（互い違いに）動かしながら飛ぶさま。燕や雁などが上下して飛び動くさま。疊韻の形容語。『詩經』邶風「燕燕（二字でつばめ）」に「燕燕子に飛び、其の羽を差池にす」と歌われて以来、六朝詩に散見する。その鄭箋に「其の羽を差池にすとは、其の尾翼を張舒するを謂ひて」云々とある。ちなみに、天空を飛翔する神仙は、羽客・羽人とも呼ばれる。鳥の羽の衣を着るとも、体に羽毛を生ずるゆえの呼称とも伝える。あるいは、この逸句も、そうした呼称を踏まえた表現なのであろうか。

- 注1 『白居易研究年報』第二号（勉誠出版、二〇〇一年）に収める拙稿『千載佳句』所収白居易詩逸句考（上）を指す。
- 2 『国立歴史民族博物館蔵貴重典籍叢書』文学篇21、漢詩文（臨川書店、二〇〇一年）所収の影印本による。この鎌倉期古鈔本二帖を、前稿で「田中家旧蔵」と記したが、これは中山忠敬旧蔵の誤り。後藤昭雄の解題参照。臨川書店刊行のパンフレット（内容見本）によって誤る。
- 3 宋玉の「神女の賦」に「温潤之玉顔」とある。
- 4 佐久節『白楽天詩後集』巻3、村上哲見『李煜』（岩波書店、一九五九年）、黄進徳『唐五代詞選集』（上海古籍出版社、一九九三年）など。
- 5 白居易は元和十四年、48歳の時、忠州で「木蓮花の図を画き、元郎中（宗簡）に寄す」詩などを作っている。
- 6 金子本は、「松風砕き助けて 潮声急なり、竹露零れ添ひて 潤水流る」と訓む。零は「コボ」れ、と読むのであろう。この訓読は、「砕」を他動詞と見なすが、ここでは下句の対「零」との関係を考えて、松風それ自体が「砕ける」（自動詞）と理解したい。ちなみに鎌倉期古鈔本・松平文庫本なども、「砕キ」と訓む。
- 7 拙著『唐詩の風景』（講談社学術文庫、一九九九年）杭州の条参照。
- 8 白詩「郡亭」（〇三五八）参照。
- 9 拙著『唐詩の風景』杭州の条や、松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、一九九九年）四四四頁以下参照。
- 10 拙著『唐詩の風景』杭州の条参照。
- 11 漢詩の事典』五二六頁以下参照。
- 12 『漢詩の事典』五三二頁以下参照。
- 13 金子本は、それぞれ「遠くに帰る」「斜に去る」と訓むが、従わない。
- 14 『大清（嘉慶重修）一統志』巻二八三、杭州府の条にも、ほぼ同様に見える。
- 15 楊軍『元稹集編年箋注』（三秦出版社、二〇〇二年）による。
- 16 盧綸『奉和李舍人昆季詠玫瑰花』詩参照。
- 17 トンボのイメージについては田口暢穂『劉禹錫の『和楽天、春詞』をめぐって——蜻蜓飛上玉搔頭』（『新しい漢文教室』第十二号、一九九一年）参照。
- 18 五代の張泌『江城子二首』其二の、「綠雲高綰、金簇小蜻蜓」も、トンボのかんざしであろう（『花間集』巻五）。
- 17 初唐の李嶠『雜詠百二十首』其四七、鶯の条に「遷喬若可冀、幽谷響還通」とある。渡辺秀夫『詩歌の森——日本語のイメージ』（大修館書店、一九九五年）参照。

- 18 中晩唐の張祜「箏」詩にも、その音色を「鶯枝澁未遷」という。
- 19 金子本四四三頁の訓点によれば、「夢得と共に（同じく）」と訓むようであるが、賛同できない。
- 20 橋英範『劉白唱和詩研究序説』（広島大学文学部紀要、第五五卷特輯号三、一九九五年）参照。
- 21 『漢詩の事典』三八六頁以下参照。
- 22 朱『箋校』卷35、「新潤亭」詩の箋（二四四六頁）参照。
- 23 九が元に誤ったケースについては、管錫華『校勘学』（安徽教育出版社、一九九一年）に収める「形近易訛字表」など参照。
- 24 羅聯添『劉夢得年譜』（同『唐代詩文六家年譜』学海出版社、一九八六年所収）など参照。
- 25 宝曆二年（八二六）の冬に成る劉詩「酬樂天揚州初逢席上見贈」など参照。
- 26 卞孝萱・卞敏『劉禹錫評伝』（南京大学出版社、一九九六年）など参照。
- 27 拙著『唐詩歲時記』二九五頁以下参照。
- 28 『漢詩の事典』四九〇頁以下参照。
- 29 王云路『漢魏六朝詩歌語言論稿』（陝西人民教育出版社、一九九七年）二六五頁以下参照。

【前稿の補訂】

● 3766 「聞裴李二舍人拜綸閣」 詩題中の裴字、鎌倉期古鈔本にも、正しく裴に作る。また詩題中の「裴李二舍人」の名について、前稿では「裴・李の名は未詳」としたが、陳貽焮主編『增訂注釈全唐詩』（文化芸術出版社、二〇〇一年）巻四五一（朱茂漢執筆）には、裴素と李褒を指し、開成年間（三八六〜八四〇）の作とする。これは、白居易と交友關係を持つ姚合の「李十二舍人・裴四二舍人両閣老が、白少傳の寄せらるるに酬ゆるに和す」（「和裴李二舍人酬白少傳見寄」とも題する）詩に着目した結果である。姚合の詩中には、李と裴の二人が同時に中書舍人（知制誥を含む）に任命されたことを、「綸闈に命を并ぶるは 誠に宜しく賀すべし」という。また詩題中の「白少傳」とは、もちろん大和九年（八三五）十月、太子少傅（分司）となつた白居易を指す（会昌元年「八四二」免官）。同書巻四九〇には、丁居晦『重修承旨学士壁記』に

よって、開成五年（八四〇）六月、裴素が中書舍人となり、李褒が同時（同じ月に）庫部郎中・知制誥となったことを指摘し、詩は開成五年の作とする（陶敏・湯麗偉執筆）。姚合詩の人名の比定自体は、すでに陶敏『全唐詩人名考証』（陝西人民教育出版社、一九九六年）にも見えている。また『重修承旨學士壁記』については、岑仲勉『郎官石柱題名新考訂（外三種）』（上海古籍出版社、一九八四年）に収める「翰林學士壁記注補九」も参考になる。

裴素と李褒の二人を指すとする朱茂漢の説は、充分説得力を持つ。ただし白詩の逸句は、「開成中」の作とするよりも、開成五年の作と見なすべきであろう。従って「備考」中の「作成年代未詳」を、「開成五年、69歳の作」に訂正したい。この詩は本来、会昌二年（八四二）に成る『白氏文集』七十巻本に初めて収められるはずの作品である。

前稿の「語釈」には、さらに「綸閣を拝す」を、「見習い役「知制誥」から正規の中書舍人に昇格したことをいうらしい」と記したが、これも単に「中書舍人（知制誥を含む）に任命されたことを指す」に改めたい。

● 3768 「辱牛僕射一札……」 詩題末の三字「寄懷詩」は、松平文庫本に従ったものであるが、鎌倉期古鈔本の文字も同じである。

● 3773 「辱牛僕射相公一札……」 詩題中の「各繼來意」の文字、鎌倉期古鈔本も、「各」字を重複しない。また鎌倉期古鈔本では、詩題中の異文注記「遺物」が、「三篇」の下に入ることを示す線がかすかに見えている。

（完）